

『蜻蛉日記』

- 女性の生き方 玉の輿は幸せか? -

定員・回数：60人・3回

時間・場所：午後2:00～3:30・生涯学習センター研修室

費用：受講料600円

講師：小説家 博士(文学) 奥山景布子

千年の時をさかのぼって、古典の世界へ。『蜻蛉日記』に触れてみましょう。この作品は、現存する平安文学のうち、女性の手になる日記(手記)スタイルとしては最も古く、『源氏物語』にも大きな影響を与えました。大臣家の御曹司と自らの結婚生活をリアルに描き出したもので、思うに任せぬ日々に悩む筆者の姿は、現代人にも共感しうる部分が多いと思います。

1/19(土)	<p>不幸自慢は幸せ自慢? -[女の一人語り]とは</p> <p>『蜻蛉日記』の筆者は、「藤原倫寧女(ともやすのむすめ)」「藤原道綱母(みちつなのはは)」と呼ばれ、本名は伝わっていません。娘から妻、母となる過程で味わった喜怒哀楽を、どのような表現で描こうとしたのかに注目します。</p>
2/16(土)	<p>「身のほど」を知る - 書く女の苦しみ</p> <p>当時の社会では、貴族女性が生きる選択肢は少なく、筆者が歩んだ道は、傍から見れば恵まれた人生のはずが、むしろ行き場のない悲しみ、苦しみは、どうしても深まっていきます。書くことは筆者に何をもたらしたのかを探っていきます。</p>
3/16(土)	<p>ユーモアと諦め - 作家にならなかった女の選択</p> <p>『蜻蛉日記』下巻では、自身の老いや、次第に淡々としたものになってくる夫婦関係、息子や新たに迎えた養女のエピソードなどを描いています。人生の後半にさしかかり、日記の表現方法にも変化が…。次第に書くことから離れていく、「日記の終わり方」を読み解いていきます。</p>

